2015.10.10

博物館 Dictionary No.182

◆あなたに語る・時代を超えて生きる心◆

—特別展覧会「琳派誕生400年記念　琳派　京を彩る」—

光悦町の昔と今

「光悦町」、京都市北区にはこんな町名があります。では、この名前が何に由来するのか、聞いたことはありますか。そう、ただいま開催中の特別展覧会「琳派　京を彩る」の主人公の一人、本阿弥光悦にちなんでいます。

光悦は永禄元年（1558）、父・本阿弥光二と母・妙秀のあいだに生まれました。本阿弥家は代々、刀剣の鑑定を家業としていましたが、光悦は芸術的才能に恵まれ、書・陶芸・漆芸などの分野で、輝かしい事績をのこしています。とくに、書は当時から能書の誉れがたかく、近衛信尹（1565～1614）や松花堂昭乗（1582～1639）とならび、「寛永の三筆」にかぞえられ、味わいのある筆づかいは多くの人を魅了しています。病を患いながらも芸術活動をつづけ、寛永14年（1637）に80歳で没しました。

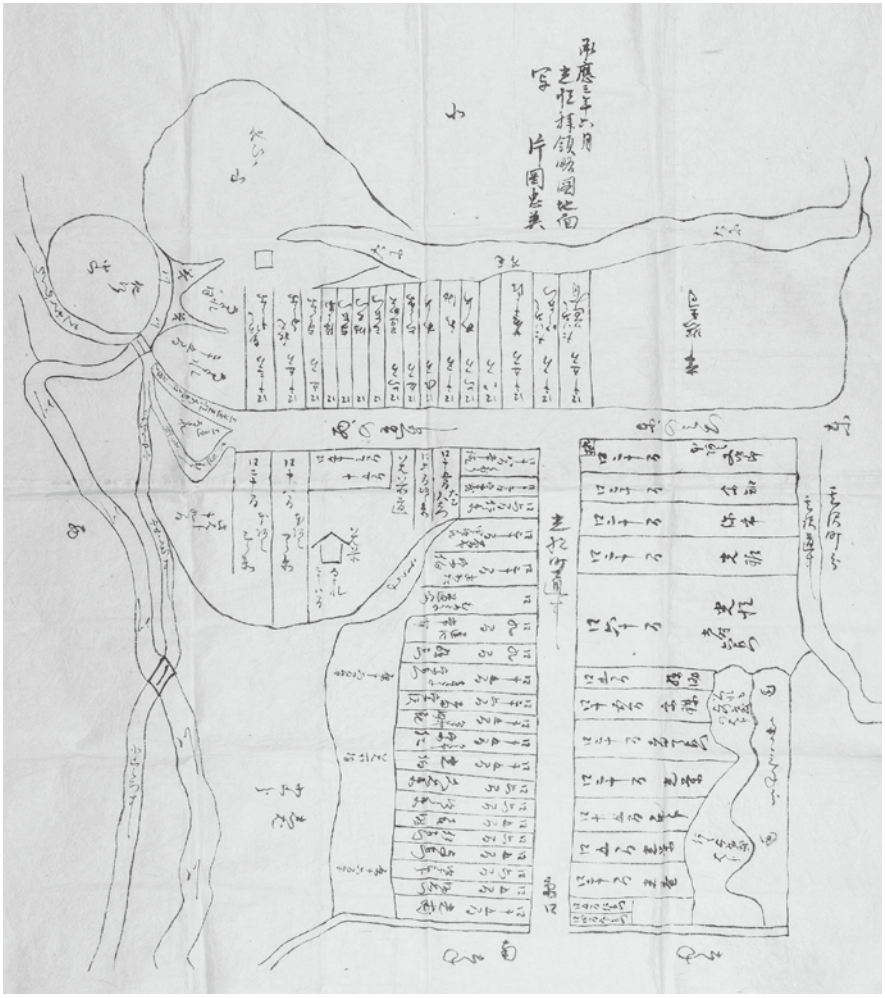

図1　《光悦町古図写》個人蔵

さて、光悦町をふくむ一帯は「鷹峯」と称され、同地は『本阿弥行状記』という本阿弥家の伝記資料によれば、元和元年（1615）、大坂夏の陣が終わってまもなく、光悦が徳川家康より拝領したと伝えます。現在でも、鷹峯のつく町名は光悦町のほか、北鷹峯町・南鷹峯町・鷹峯土天井町・鷹峯黒門町があり、この辺りが拝領した場所に該当するのでしょう。

光悦はもらった土地を「一類、朋友、ひさしくめしつかひし者どもまでに銘々分ちとらせ」た、つまり親類や友人、長年召し使った職人たちに分け与えたと行状記には書かれています。こうした状況の一端を示すのが、展覧会の最初の部屋に展示されている光悦町の古図です（図１）。

この図は現在、光悦寺に伝わる古図を承応３年（1654）６月に写したもので、いまの地図とおなじように、北を上にして描かれています。くずし字というグニャグニャした字で書かれているため、読みにくいかもしれませんね。南北にのびる「光悦町道すし」、東西にのびる「西への道すし」および「東へのみち」とがＴ字形に交差する通りの両側に、屋敷が短冊状に配置されているのが分かりますか。東側に描かれた、ひときわ大きな間口をもつのは光悦の屋敷で、そのまわりには子の光瑳（1578～1637）、孫の光甫（1601～82）をはじめとした一族、茶屋四郎次郎・紙屋宗仁・筆屋妙喜たち、親交のあった友人たちの屋敷がみえます。彼らの大半は、光悦の手紙にしばしば顔を出しており、まさに古図は、さきの行状記の記述を裏付けているといえるでしょう。ちなみに、中央にみえる家の形をした「いはい所」とある場所は、現在の光悦寺にあたります。

では、こうした町並みが光悦の生きている時、実際に存在していたのかというと、どうもそうではないようです。「この人がここに住んでいたらいいな」とか「この人をここに住まわせたいな」といった理想、あるいは予定がこめられていたといわれています。とはいえ、まったくの絵空事ではありません。たとえば、貞享４年（1687）８月に書かれた尾形権平（のちの乾山、1663～1743）の証書をみてみましょう（図２）。父である宗謙の遺言にしたがい、たしかに書面どおりの遺産をうけ取ったという内容で、なかには「鷹峯家屋敷一ヶ所」とあり、尾形家は鷹峯に屋敷をもっていたことが分かります。これは、光悦屋敷のほぼ真向かいに描かれた、権平の祖父である尾形宗柏の家と考えられるのです。

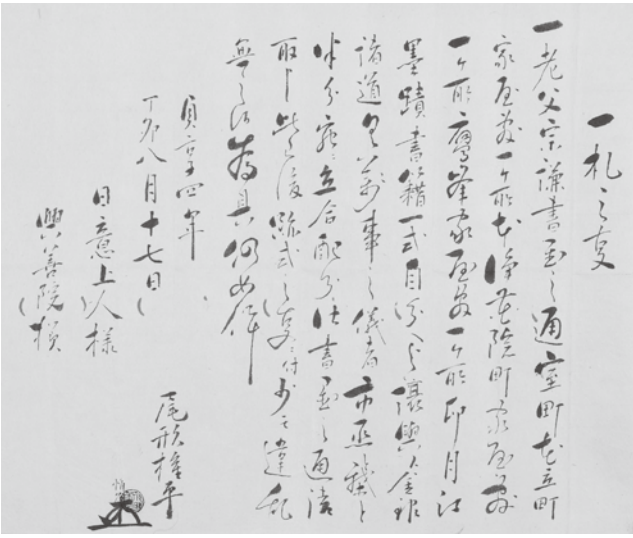

図2 《尾形光琳関係資料のうち尾形権平証書》京都国立博物館蔵

それにしても、この古図と現在の地図を比べると、おそろしいまでに地形が一致しています。西に流れる川は紙屋川、南北にのびる道は千本通、その突き当たりは鷹峯の交差点とみれば、「ああ、なるほど」と納得する方もたくさんいるのではないでしょうか。マンションの建設や道路工事など、開発にともない、古い地形や地名が失われることの多いいま、とても素晴らしいことだと思います。

（美術室　羽田　聡）

印刷・富士印刷社